広島県高次脳機能センター機関紙

Hiroshima Higher Brain Function Center

ひろしま県 高次脳機能センターだより

第５号
平成27年7月15日 発行

CONTENTS

特集
３病棟の紹介……②
作業言語療法科の紹介……③
利用者のページ
青森輝夫様……④
コラム等
コラム等……⑤
関係機関ニュース
お知らせ……⑥
井野口病院……⑦
案内
診療案内・スタッフ紹介等…⑧

広島県立障害者リハビリテーションセンター 医療センター3病棟開設のご案内

広島県立障害者リハビリテーションセンター
広島県高次脳機能センター　副センター長
3病棟　病棟医長　近藤　啓太

この度、平成27年4月1日広島県立障害者リハビリテーションセンター医療センター内に、高次脳機能障害の患者さんのリハビリテーションを専門に行う40床の新病棟を開設いたしました。これまでは、20床という限られたベッド数の中での運営であったため、入院できるまで3～4か月待機していただく必要があり、大変なご迷惑をおかけしておりました。また、整形外科領域などの様々な障害をお持ちの患者さんとの混合病棟であったことから、高次脳機能障害へ特化した環境整備や看護体制の整備を行うことが困難でありました。この度の新病棟の開設により、それらの問題は解消され、これまで以上に、高次脳機能障害の患者さんの障害の軽減と生活自立能力の向上を目標としたリハビリテーションの充実を図っていく所存でございます。今後ともよろしくお願いいたします。

特集1

3病棟の紹介

●平成27年4月1日オープン

平成26年10月にすべてのリニューアル工事が終了し、少しずつ必要な医療機器やナースユニット等の搬入が行われました。新しい病棟であるがゆえに、ボールペン1本、ごみ箱1個から揃えていく必要があり、3月末の段階では、「不都合はないだろうか」といった不安にもさいなまれました。

しかし、多くの助けもあって、桜の咲く4月1日に、無事に12名の患者様に新病棟に移動していただくことができました。新しい環境に戸惑ったり、体調を大きく崩したりする人もなくスムーズにスタートをきることができ、ホッと胸をなでおろしました。

3病棟は、高次脳機能障害を有する方のリハビリ病棟です。今自分がどこにいるのか場所がわからなくなり自室に戻ることができない人、入院していることを忘れてしまい無断で離棟、離院する人もおられ、安全面に配慮した設備を整え、スタッフ全員で見守るなどの対応が求められます。新しい環境に慣れていただけるように関わり、生活リズムを整えたり、日常生活動作の習得、スケジュール表を使用した自主的な生活ができるようスタッフ一同、支援していきたいと思っています。

●設計上で工夫した点

・エレベータのみで出入りができるようにし、訓練室等への動線をわかりやすいものにした。

・病室の床材料を、転倒転落時の衝撃を、少しでも和らげられるものにした。

・集団生活や感情コントロールの苦手な人のために、一人の空間をできるだけ広くし、木目調の床頭台やオーバーテーブル等を選択し、落ち着いた雰囲気が漂うようにした。

・見守りや関わりがしやすいように、ナースステーション付近に、食堂・デイルームを設けた。

・食べ物の管理が個々でできるように、鍵付きの収納庫を設けた。

・タッチタイプの病室表示のみならず、自室がわからなくなる人のために、目印が付けられるマグネット病室表示板も使用した。

・構造をHの字とし、中央にナースステーションを配置しオープン化した。

●オープン化に伴うメリット

記憶障害や遂行機能障害の代償手段として、メモリーノートが活用されています。このノートをリハビリに行く前と後に、必ず看護スタッフのサインや印をもらって行動をされます。ナースステーションをオープンカウンターにしたことで、どこからでも声をかけやすくなりました。「行ってらっしゃい」「どこの訓練?」「お帰りなさい」等の繰り返しによって親近感がもてるようになります。これはコミュニケーションの第一歩であり、記憶代償支援にもなっていると認識しています。

●スタッフのスキルアップ

3病棟の病棟目標を「一人ひとりが安心してリハビリテーションができるように、関連部署と連携しながら入院生活を支援します」としました。その目標に向け、医師やコ・メディカルスタッフ、高次脳機能障害者やその家族の力や知恵を借りながら、定期的な研修を積み重ねていきたいと思っています。また、関連部署のスタッフの名前と顔写真を掲示し、定期的な会議以外にも、コミュニケーションをとりやすいように工夫しました。

一人の力は微々たるものでも、スクラムを組むことで、大きな力が発揮できると思います。失敗はあるかもしれないが、その中から大切なものを学び、繰り返さないようにしていきたいと思っています。

●今後の課題

日常生活全般に対する評価システムの構築を目指し、地域リハに繋げていくことが大きな今後の課題となると考えています。

最後に高次脳機能センターの理念は「脳障害者とその家族が幸せに暮らせる社会を目指す」です。日々の入院生活の中で、ちょっとした幸福や喜びを一緒に感じられるように努めていきたいと思います。

特集2

作業言語療法科の紹介

昨年10月に新しい訓練室になりました作業言語療法科では、現在13名の「作業療法士」と8名の「言語聴覚士」で日々患者様の支援をさせていただいています。作業療法士と言語聴覚士は国家資格を有した専門職であり、訓練では「作業療法」「言語聴覚療法」を用いて患者様の支援を行います。

●作業療法とは

「身体または精神に障がいのある方、又はそれが予測される方に対してその主体的な生活の獲得を図るため、諸機能の回復・維持および開発を促す作業活動を用いて行う治療、訓練、指導および援助」をいいます。

●言語聴覚療法とは

主として言語機能や聴覚機能が低下しコミュニケーションに問題が生じた方や摂食・嚥下機能に障がいがある方に対し、機能の回復、能力の向上、維持を目的とし各種検査、評価、訓練、指導及び援助を行うことをいいます。

当科では、2つの専門職が協力して、県内外の頭部外傷や脳血管疾患等に起因する高次脳機能障害を有する患者様への支援は元より、パーキンソン病などの神経難病疾患・脳性麻痺・脊髄損傷・骨折や筋腱損傷といった整形外科疾患の方など、様々な疾患・障害に応じたリハビリテーションを実施しています。個別対応のリハビリだけではなく、症状に応じて就労前トレーニングやコミュニケーション技術を高めるグループ活動を多く実施していることと、復職復学支援・運転再開の見極め等を行っていることは、他院にない特徴だと思います。

そもそも「リハビリテーション（リハビリ）」とはラテン語でre（再び）-habiris（適した）、つまり再び適した状態になることと直訳できます。WHO（世界保健機構）はリハビリテーションを「能力低下やその状態を改善し、障がい者の社会的統合を達成するためのあらゆる手段を含んでいる。リハビリテーションは障がい者が環境に適応するための訓練を行うばかりでなく、障がい者の社会的統合を促す全体として環境や社会に手を加えることも目的とする。そして、障がい者自身・家族・そして彼らの住んでいる地域社会がリハビリテーションに関するサービスの計画と実行に関わり合わなければならない。」と定義しています。

高次脳機能障害を有する方への支援については、まさにリハビリテーションの定義の通り包括的なアプローチが重要とされており、低下した諸機能の回復に重きを置いたアプローチだけでなく、残存した能力を用いて日常生活や社会生活に適応する方法を考えたり、患者様を取り巻く環境に対してアプローチを行うことも大きなウェイトを占めています。

さて、高次脳機能障害のリハビリは「自分自身を知る」ことが究極のゴールとなることをご存じでしょうか？

初診患者様からは「自分に何ができて何ができないのかわからない」という言葉を聞く事が多いです。自身で感じている症状が実生活でどのような影響が出るのかは本人では推測できない場合も多く、私達訓練士はそういった状況の患者様に寄り添い、生活や訓練における課題を通して、「自分自身を知る」プロセス（過程）を患者様と共有していきます。

例えば同じ位の知的水準を有していたとしても、自分自身を知らないと「困ったことはない」と思えることが、自身を知ることで「日常生活で困らないけど、仕事ではこんな時に困る」→「こんな時にはこうしたらよい」という判断ができるようになります。

麻痺が無いから運転ができる訳ではありませんし、会話ができるから仕事ができるという訳でもありませんね。自分自身の困り事と向き合い、起こりそうな困難を予測したり、困難を回避する方法を学ぶこと→「自分自身を知る」ことなのです。

少々難解なことを述べてしまったように思いますが、重要なことですのでこの誌面でお伝えさせていただきました。

皆様が幸せになれる為のお手伝いをさせていただくため、科員一同日々精進して参ります。

よろしくお願いいたします。

利用者のページ

「病気に負けず」

青森　輝夫

53年間、病気と無縁だった私の身体に突然異変が起きたのは6年前。その日は妻と2人の息子が出掛けている留守番の出来事だった。右の頬が緩んだと思ったら床に倒れ込んだ。意識はあったが身動きが出来ない。4時間後に妻が帰宅して救急車で広島市内の病院に担ぎ込まれたが診断の結果は左側の脳内出血。幸運にも手術はしないで済んだが、右手足がまったく動かず、言葉も出なくなっていた。翌日家族と会った時に涙を流したが、自棄になる事はなかったし、生きている事の方が嬉しかった。神様から生かされているとさえも感じた。家族の顔が認識できたし、頭の中は正常だと思ったからそんなに落胆はしなかった。

入院3日目から足、手、言葉のリハビリが始まった。それと同時にリハビリノートを書きだした。B4用紙を縦に1週間の日付、横に足、手、言葉をリハビリの簡単な表を作った。やった事はなんでも書いておかないと落ち着かない性分なのだ。左手で書くことは難しかったけど意志疎通は筆談だけだったので脳のリハビリには良かったのかもしれない。病院で借りた画板に挟んだこのノートが入院生活には欠かせない物となった。書くことによって心身の成長が分かりリハビリに意欲的になった気がする。そんな調子なのでリハビリが辛いとか、痛いとか無かったし、やりたくないと思った事は一度も無い。リハビリ室から病室に戻っても反復練習や自分で考えた自主リハビリに没頭した。今でもノートを見ると入院生活が甦る。それぐらい毎日のリハビリメニューが一杯書き込んである。退院後に病院を訪ねたら「いつも何かやっていたもんね」と言われるが、「自分が良くなるためですから当たり前ですよ」と返すことにしている。リハビリは4本杖の歩行練習、あいうえおの発声練習から始めて4ヶ月余り経った退院時は杖無し歩行、簡単な文章が言えるようになった。手は目立った進歩はなかったが、横になった状態だったら右手が上がるようになった。

退院後は復職に向けての支援を受けるため県リハに週に一回通うことにした。初診の結果、足はリハビリ不要との事で手と言葉はもっとよくなるようにリハビリを勧められた。心理テストの評価に異常は見られなかったことで先生からの車運転許可も頂いた。いよいよ自分で決めた復職条件をクリアするための最終段階に入った。条件は①運転②日常会話③パソコン。②と③はなんとかなりそうだが①は一番の難関。どれだけ難しいか、どれくらい経ったらできるのか想像もつかなかった。それでモチベーションを上げるため会社の上司に3つの状況を毎月報告することにした。実際に運転するまでに運転シュミレーションを自主リハビリに取り入れた。通勤の道順を頭に浮かべて「ここでは信号で止まる」「ここは急なカーブだから少しブレーキを踏んで」と左足でアクセルとブレーキ操作、左手で丸いクッションをハンドル代わりにした。そしてシュミレーションの成果を見せる時がきた。自動車学校に行き左アクセルの車を運転したのだ。助手席に教官、後席には作業療法士さんと妻を乗せて。クランク、車庫入れなどを含めて1時間ほど運転した後に教官から「大丈夫ですよ」と言われた時は一安心。退院して3ヶ月経った時だった。1ヶ月後に私の車を専門業者に左アクセルに改造してもらい、助手席に家族を乗せて毎日運転を始めた。最初は心臓が飛び出るぐらい緊張したが、1ヶ月でひとりでも乗れるようになったのは意外だった。

以上で復職条件をクリアしたので、いよいよ会社との復職手続きに入った。復職の意志を伝えて産業医の面接、上司との面接を終えた結果、復職が6月1日に決まった時は何とも言えない達成感で職場からの帰り道で涙が溢れて止まらなかった。この1年間、無理して頑張った気持ちはなかったのに、やっぱり必死だったようだ。

復職して5年過ぎた今、リハビリノートは大学ノートに形を変えリハビリの事は少なくなったが5冊目を終えようとしている。病気前と違って左手だけでの書類の整理に時間が掛かり、構音障害で議論は苦手、注意障害で集中できない時があるが何とか仕事は出来ている。今年の10月には定年を迎えるが生かされていることに感謝してもう少し働きたいと思う。

コラム等

コラム

〝わかりにくい〟高次脳障害

村田　芳夫

「障害」とは「妨げ、さわり」という意味の言葉ですが、医学的には「機能的に問題が生じている状態」と認識されています。手足の動きに問題がある場合などは見た目にもわかりやすく、「ああ、この人は障害があるんだなあ」と気づきやすいのですが、私たちがお世話させていただく患者さんの中には、普通に歩いて病院に来られ、知らない人にはどこに障害があるのかわからないことがあります。

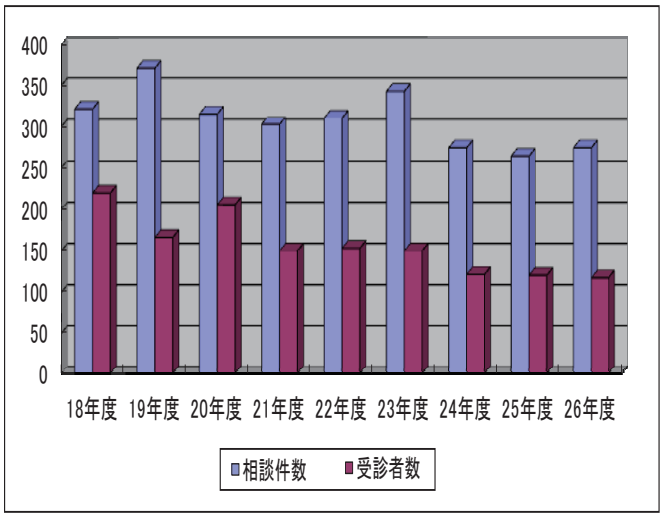
「高次脳機能障害」は交通事故や脳卒中が原因で脳に傷を負ってしまい、ものが覚えられなくなったとか、日常生活の上でおおきな妨げとなるものですが、一見しただけでは「障害」が分かりにくいため、以前は世間の認知度も高くありませんでした。患者さんが増えるに伴い、最近ようやく注目していただけるようになった感はあるものの、障害をもった方々・ご家族が安心して過ごせる社会の実現にはまだまだ時間がかかりそうです。

高次脳機能センター実績

当センターが開設して丸9年が経過した。開設当初からの新規相談件数、新規受診者数はグラフのとおりであるが、延べ利用者は1、400名を超過した。そのうち、継続的にリハビリ（支援）を行っている方は、400名強となっている。

新規相談の約半数がリハビリに関することであり、次いで多いのが、労災事故や交通事故の後遺障害認定などの診断に関する相談である。年齢別では、約半数が41～64歳で17歳以下の学齢層も5％を占めている。地域別では、広島市、次いで広島中央が多く、県外からの相談も1割ほどあった。

今後も増えるであろう利用者をいかに地域の福祉につないでいくかが課題となっている。



つぶやきコーナー始めました！

「生協の白石さん」という本をご存知でしょうか？学生から東京農工大学生協への質問を、その職員、白石さんが回答したものが話題となり、ついに本になったというものです。そのウィットにとんだ回答が人気を博したのですが、それと、ツイッターの両方をまねて、高次脳機能センター受付前につぶやきコーナーを設置しました。

日頃悩んでいるけれど、なかなか言葉にすることができない、こんなことを言ったら他の人はなんて思うか心配…など、きっと誰にもこのようなことがあるのではないでしょうか？それを言葉に出してみることで、心が軽くなるのでは…？　そう思って始めたのが、このつぶやきコーナーです。

2015年1月から始めたのですが、クイズの投稿があったり、悩みを打ち明けたり、それに対して誰かから回答があったり、新聞の切り抜きがあったりと、内容はさまざまです。匿名にすること、他人の中傷は禁止であること以外は自由な意見交換の場です。

自分が投稿したものに、誰かが反応してくれるとてもうれしいものです。どうぞ一度覗いてみてください、そしてちょっぴり勇気をもって投稿してみてください。

（イーゼルはあけぼの利用者さん作です。併せてご覧ください。）

関係機関ニュース

講演会報告

『高次脳機能障害の地域生活』
～医療から福祉へ
地域連携のシステムを学ぶ～

日時：平成27年6月7日(日)
午後1時～4時半
場所：広島市中区地域福祉センター
主催：NPO法人高次脳機能障害サポートネットひろしま

東京慈恵会医科大学付属第三病院リハビリテーション医学講座の渡邊修教授が、高次脳機能障害の基礎知識や地域でのリハの効果の高さについて、分かりやすく講義されました。続いて、同病院の石川篤作業療法士が、リハビリテーションの流れについて事例を交えて話されました。その後、広島県高次脳機能センターの村田芳夫センター長が座長を務め、フロアからの質疑応答も行ないました。医療から地域への連携の大切さを学ぶことが出来ました。

家族会情報

脳外傷友の会第15回全国大会は東京都で開催

平成27年11月20・21の両日で、東京都の品川区立総合区民会館にて開催予定です。記念すべき15周年大会なので、友の会の皆さんも張り切って準備中です。皆様、ぜひご参加ください。

勉強会情報

家族セミナーのご案内

高次脳機能センターでは、毎月2回、高次脳機能障害者やその家族、その他関心をお持ちの方を対象に、次のとおり学習会を開催しています。

場所：広島県立障害者リハビリテーションセンター（会場は時々変わりますので2階受付でご確認ください）

●リハビリテーションと本人への関わり方について
日時：8月7日（金）
8月18日（火）
14：00～15：00

●福祉制度について
日時：9月4日（金）
9月15日（火）
14：00～15：00

●脳障害とその後遺症について
日時：10月2日（金）
10月20日（火）
14：00～15：00

参加を希望される方は、参加申込書にご記入のうえ、高次脳機能センターにお申し込みください。当日参加も可能です。

お知らせ

図書棚の紹介

蔵書の一部を紹介します。本の貸出をご希望の方は、スタッフに声を掛けてください。尚、貸出期間は2週間までとさせていただきます。

書籍名	出版社
目印はフォーク！カーラの脳損傷リハビリ日記	クリエイツかもがわ
脳のリハビリテーション「1」「2」	協同医書出版社
理解できる高次脳機能障害	三輪書店
ふたたび楽しく生きていくためのメッセージ 後天性脳損傷の子どもをもつ家族との対話	クリエイツかもがわ
わかりやすい 小児の高次脳機能障害対応マニュアル	診断と治療社
日々コウジ中	主婦の友
わかってくれるかな、子どもの高次脳機能障害 発達から見た支援	クリエイツかもがわ

おすすめの1冊を紹介します。

「わかってくれるかな、子どもの高次脳機能障害 ― 発達から見た支援」
クリエイツかもがわ発行　太田　令子

実生活の格闘から見える、子どもの思い、親の痛み。

幼児期→小学校低学年→高学年→中学・高校生→青年期と成長にしたがって変わる困りごと。その行動の背景に何がある？手立ての工夫は？等、どの子にもある、子育ての悩み・迷いへのヒントが書かれています。とてもわかりやすく、読みやすい本です。おすすめの1冊です。

施設紹介

井野口病院

【施設紹介】

当院は、東広島市にある、救急医療から在宅生活に患者さんが帰るまでを幅広く担う、地域に根差した病院です。平成24年8月に広島県から「高次脳機能地域支援センター」に指定され、翌年5月には、回復期病棟（49床）を開設し、高次脳機能障害に対する「回復期リハビリテーション（以下、リハビリ）」にも、積極的に取り組んでいます。入院患者さんだけでなく、外来の方の通院リハビリも実施しており、高次脳機能障害を持つ方やご家族の生活を継続して支援しています。

【当院の特徴】

（1）急性期からの対応が可能

2次救急と一体化し、脳外科・循環器内科・外科・整形外科の急性期から対応可能です。医療機器もMRI、CT、エコーと充実しています。

（2）生活に密着した回復期リハビリ

当院の回復期リハビリ病棟は、365日体制、チーム医療による生活リハビリに力を入れています。リハビリでの提供単位数9単位（3時間）だけではなく、その他の時間も病棟スタッフの協力のもと、生活に基づいた病棟リハビリを実施しています。高次脳機能障害の症状やその方のパーソナリティ、生活背景に応じて、病棟内での役割をしていただいたり、リハビリスタッフと病棟スタッフが一緒に、その方にあった環境調整を考えたり工夫しています。また早・遅出にリハビリスタッフも参加し、1日の生活を多職種で支援しています。

（3）多職種によるアプローチ

患者さんの状態の把握や、多方面から退院後の生活を見据えて総合的な支援が行えるよう、定期カンファレンス（月1回）に医師、病棟スタッフ、リハビリスタッフだけでなく、医療ソーシャルワーカー、心理士、栄養士も参加しています。近年注目が高まっているリハ栄養の観点は、当院のリハビリにとっても、強い味方となっています。また毎週1回リハビリ専門医が回診を行い、症状や回復過程に応じた最適なリハビリプログラムの実施が行えるようにします。

（4）社会復帰支援

退院後の患者さんがスムーズに在宅に移行できるよう、家屋調査と外出・外泊訓練にも積極的に取り組んでいます。また、安全な在宅生活が送れるように、大手介護用品レンタル会社と提携して、入院中からその方にあった最新の自助具・福祉用具を導入し、使用練習も行うことができます。社会復帰支援として、最近では自動車の運転免許再獲得希望が増加してきており、時期や能力に合わせて、評価および訓練を行っています。

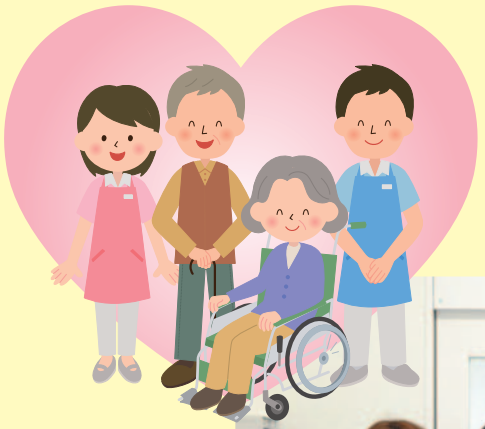
（5）患者さんとご家族のサポート

患者さんとご家族の方が、日頃の悩みを話し合い、精神的負担の軽減が図れることを目的として、定期的に「患者家族勉強会」を開催しています。この会では、高次脳機能に関わる知識を得たり、座談会形式のおしゃべりができる場となっています。入院時、病識欠如のため「早く帰りたい」と強く訴えられる患者さんも、このような場を通じて他患者さんと仲良くなり、病棟内ではげましあううちにリハビリに対する表情が変化し、笑顔が多くなってくることもあります。

私たちは、これからも患者さんの笑顔が少しでも増えて、その人らしい生活に戻れるように、また患者さんが当院の理念である「元気はつらつ」とリハビリに取り組めるように、それぞれの方にあったリハビリプログラムを提供していきたいと思っています。

【問い合わせ先】

〒739-0007
東広島市西条土与丸6-1-91
井野口病院　地域連携室
電　話：082-422-3711
FAX：082-422-3714



高次脳機能センター　スタッフ一同

新しいメンバーも加え
気持ちも新たに頑張ります！

編集後記

夏の日差しを浴びて、新緑がまぶしい季節になりました。
高次脳機能センターのメンバーになり早3カ月。
たくさんの人に支えられ、なんとかここまで来ることができました。
日々、学ぶことが山積みです。
笑顔を忘れず、皆様のお役に立てるよう頑張ります。
よろしくお願いします。

診療案内

□ 診察の流れ
予約制になっております。予めお電話でご予約の上ご来院ください。

① 電話予約
082－425－1455（代表）高次脳機能科受付　内線237
受付時間　月～金　9:00～17:00
専門のコーディネーターが対応します。
相談のみでもお受けします。

② 高次脳機能科・神経内科　外来診療
脳神経に関する専門医が診察します。　(H27.4.1～)

	月	火	水	木	金	
9:00～12:00	村田（むらた） 近藤（こんどう）	村田（むらた） 近藤（こんどう）	村田（むらた） 近藤（こんどう）	村田（むらた） 近藤（こんどう）	細見（ほそみ） 近藤（こんどう）	1診 2診
13:00～13:30	村田（むらた） 近藤（こんどう）	村田（むらた） 近藤（こんどう）	村田（むらた） 近藤（こんどう）	村田（むらた） 近藤（こんどう）	近藤（こんどう）	1診 2診

近藤 Dr.
第1・3 PM あけぼの診療

診察をスムーズに行うため、現在診療を受けている医療機関の主治医と相談のうえ、可能であれば紹介状・頭部ＣＴやＭＲＩ等の画像をお持ちください。

③ 入院・リハビリテーション・社会復帰支援・相談、家族支援
高次脳機能障害の病態に応じて医療と福祉の連続したサービスを提供します。

〒739-0036 東広島市西条町田口295-3　TEL 082-425-1455　FAX 082-425-1094